

# 大石一久氏寄贈 拓本にみる大村の石造物

会場 歴史資料館 企画展示室 期間 令和5年4月29日(土)～6月4日(日) 10:00～18:00  
作成 大村市歴史資料館



### 上八龍の線刻仏

鎌倉～室町時代カ 大村市弥勒寺町 熊野神社内

弥勒寺寺領内、または近隣のものと考えられる、一石一尊の如来型線刻石仏。一般の如来の姿とは異なり、手印を結んでおらず衲衣が手を覆っている。  
市指定有形文化財。



### 下八龍の線刻仏

鎌倉～室町時代カ  
大村市弥勒寺町  
おおむら夢ファームシュシュ内

弥勒寺町の字下八龍にあった線刻石仏。  
上八龍の如来型線刻石仏と形態が同様の姿が彫られている。  
市指定有形文化財。



### 弥勒寺石堂屋敷 線刻石仏

鎌倉～室町時代カ  
大村市弥勒寺町 個人宅

弥勒寺町の石堂屋敷という地域にある、輪光を背にした如来型線刻石仏。この地域や近隣には、如来型線刻石仏、不動明王線刻石仏、仏頭がいくつも確認された。特に如来型線刻石仏は、手元の特徴的な表現がいずれの石仏にも共通して見られる。



### 弥勒寺

### 線刻不動明王像石仏

鎌倉時代カ  
大村市弥勒寺町 弥勒寺公民館前

自然石に彫られた坐像の不動明王像石仏。表情は忿怒の相をしており、右手には三鈷剣、左手には羂索を持ち、光背には火炎光を背負う。  
一般的な不動明王の姿だが、装飾豊かで華やかな姿が彫り出されている。



## 慶長十九年銘今富半円柱形状伏碑 (大村今富のキリシタン墓碑)

慶長 19 (1614) 年 大村市今富町

「干」のカルワリオ罪標十字架と「慶長十九年」の文字が彫られた、かまぼこ型のキリシタン墓碑。後に仏教式の立塔に転用された。近年の研究で、キリシタン墓碑の被葬者と仏塔の被葬者、また仏塔の法名と俗名はそれぞれ別の人物であることがわかった。これまで言われていた、被葬者・一瀬栄正とその子であり俗名の持ち主・栄相という説が疑問となったため、いずれの被葬者も何者かは不明である。県指定史跡。

## 寛永十九年銘田下自然石塔婆

寛永 19 (1642) 年 11 月 20 日 大村市田下町

市内萱瀬地区田下にある一瀬家の墓地にある、高さ約 1.3m の自然石塔婆の墓。戒名などはなく、中心に「一瀬半右衛門尉」、その左右に「寛永十九天／十一月二十日」と記されている。

一瀬半右衛門尉は、「新撰土系録」四十四下には通称のみ記され、その事績はおろか、諱さえも記録されていない。しかしながら、その祖父（半右衛門尉）にあたる人物は、元龜 3 (1572) 年の三城七騎籠りや、天正 5 (1577) 年の菅無田の戦いに参加した人物であることから、萱瀬田下に居住した在地武士と考えられる。



## 寛文三年銘田下笠塔婆塔身

寛文 3 (1663) 年 7 月 9 日 大村市田下町

市内萱瀬地区田下にある一瀬家の墓地にある、高さ約 1.7m の了然禅定門の笠塔婆の塔身部分。「妙法蓮華經」の頭書の下に戒名の「了然禅定門」、戒名の左右に「寛文三癸卯天／七月九日」と記されている。了然禅定門の俗名や事績は不明。



## 正保四年銘田下有耳五輪塔地輪

正保4（1647）年5月 大村市田下町

高さ約1.1mの有耳五輪塔の地輪部分。風・火・水輪には、それぞれ「法」「名」「釈」の文字が記され、地輪中央に「妙慶不退位」、その左右に「正保四丁亥年／五月□日卒」（日にちは摩滅のため不明）と記されている。「釈妙慶」という法名から浄土真宗との関わりが想定される。

## 承応二年銘田下整形伏碑

（田下のキリシタン様式墓碑）

承応2（1653）年3月27日 大村市田下町



仏教式の法名が彫られたキリシタン墓碑。墓碑上面がカーブしていることや、下端部が荒削りで未形成である（この部分が地面に隠れることを想定したと考えられている）などの特徴から、元は板状キリシタン伏碑だったとされている。  
市指定史跡。



## 承応二年銘田下自然石塔婆

承応2（1653）年8月5日 大村市田下町

市内萱瀬地区田下にある一瀬家の墓地にある、妙経の高さ約1.7mの自然石墓。銘文は、中央に「妙法帰寂妙経霊」、その左右に「承応二年／八月五日」とあり、被葬者の妙経はこの年に死去したことがわかる。妙経の俗名や事績は不明。



## 承応二年銘田下石灯籠竿石

承応2（1653）年8月5日 大村市田下町

妙経の墓の前に立つ石灯籠の竿石の部分。高さ約66cm。中央に「妙経霊尊前」、その下方の左右に「承応二年／八月五日」と記されている。妙経の関係者が献納したものであろうが、紀年銘に従えば、造立時期は妙経の墓と同時と思われる。



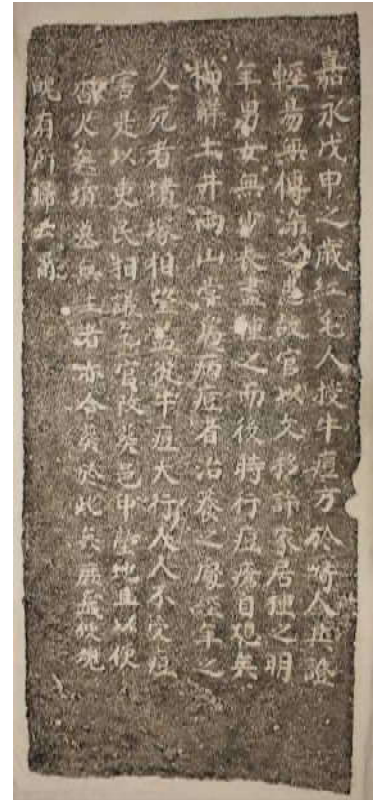
## 萱瀬田下町 靈魂塚

元文 4 (1739) 年 4 月 大村市田下町

市内萱瀬地区にある、疱瘡（天然痘(てんねんとう)）の死者を弔った慰霊碑。元は国道 444 号線の近くにあったが、現在は場所を移転している。

碑には「靈魂塚」の頭書の下に、建碑の経緯が記されている。「元文 3 (1738) 年春に萱瀬菅牟田郷で疱瘡が流行し、256 人が罹患し、うち 61 人が亡くなった。6 月には収まったが、この村の人たちは疱瘡を恐れるため、患者をいくつかの山中に隔離した。今年 (1739) 4 月、村民で麻生岳（朝追岳）の麓に靈魂塚を建て、永く供養を行うものである」

大村藩では疱瘡が発生した際には、「山揚げ」と呼ばれる徹底した隔離政策を行っていた。これが改善されたのは、長与俊達による古田山疱瘡所の開設と、嘉永 2 (1849) 年の牛痘種による予防法が確立したためである。



## 西海市横瀬郷 嘉永五年十一月銘靈魂塚碑

嘉永 5 (1852) 年 11 月 西海市西海町横瀬郷 平尾墓地

現在の西海市横瀬郷にある、疱瘡（天然痘）の死者を弔った慰霊碑。西海市指定有形文化財。

碑の正面に「靈魂塚」、裏面に「嘉永五壬子年十一月」の年紀と「横目(よこめ) 山口珪左衛門前知」以下 7 人の役職と名前を、側面には建碑の由来が記される。オランダ人のモーニッケが伝えた牛痘種は、大村藩でも長与俊達の試みを経て、嘉永 3 年から藩内で接種が制度化された。この靈魂塚は、その 2 年後には疱瘡を克服したことを示している。



## 松原町墓 寛文七年銘題目塔

(自得宗意石塔)

寛文7(1667)年12月25日

大村市松原本町

寛文7年に松原村庄屋の福田久兵衛尉が、家族や親族、そして先祖・子孫の鎮魂のために建てた題目塔。

題目塔とは、「南無妙法蓮華經」を記した鎮魂を目的として建てられた供養塔で、街道や寺院、刑場跡などに建てられた。本塔も、長崎街道の松原宿の外れ、街道沿いの墓地に建てられている。

この10年前には、大村藩を揺るがした「郡崩れ」が起きている。

190 cm近くの大きな自然石の表面を平らに加工し、そこに法華經と文字を陰刻してある。福田久兵衛の事績は明らかでないが、庄屋を務めた村の有力者であったと思われる。この塔も、その立場にふさわしい、大型の塔である。



## 武留路 仏岩三社大明神線刻石仏

鎌倉時代以降か

大村市武留路町

武留路町の南斜面にある岸に描かれた、3体の線刻仏像の内の2体。左側は約3.5mを超える大きさがあり、線刻仏では県内最大である。一方、もう1体は1m未満の小ぶりなものである。

福重の弥勒寺の線刻石仏群と同じく、手印を衣の両袖に隠して腹の前に置く如来型のものであり、背振山、求菩提山など、九州の山岳仏教の影響がうかがえる。

この線刻仏は、幕末の大村藩の地誌「郷村記」にも記述がないため、由緒や造立年代は不明。

## 大村彦右衛門家墓所内 石霊屋背面銘

寛永 10 (1633) 年 3 月 26 日

大村市久原 1 丁目

大村彦右衛門の墓の向かって右側にある、覚性院妙忍の石霊屋の背面に刻まれた銘文。銘文には「肥前国杵嶋郡戸河村住人 大工馬場口甚左右衛門尉」とあり、佐賀の砥川村（現、佐賀県小城市）の石工、馬場口甚左右衛門尉が、この石霊屋を制作したことを示す。砥川村は優れた石工が活動しており、近世初期に、佐賀の石工が、大村に来て活動していたことを示す資料である。



## 大村彦右衛門家墓所内 寛文七年三月銘幻春墓

寛文 7 (1667) 年 3 月

大村市久原 1 丁目

大村彦右衛門家の墓所内にある廟型の墓。高さ約 1m 程の小さな墓である。扉のない塔身部分に「寛文七丁未／三月□六日」「妙法 幻春霊」と刻まれている。また、屋根に相当する上部の三角形の部分には、簡単な模様が彫り出されている。被葬者の幻春について詳細は不明。

## 竹松聖宝寺跡

### 天和二年九月十八日銘大村純茂建碑及び大永二年十一月銘慶哲墓地輪

大永 2 (1522) 年 11 月／天和 2 (1682) 年 9 月 18 日

大村市竹松本町 竹松第 2 公民館裏

竹松の聖宝寺跡にある、大村純次（法号：慶哲）の墓（逆修碑か？）の地輪（高さ約 12 cm）と、江戸時代初期の大村彦右衛門家当主・弥五左衛門純茂が建てた観音像（高さ約 58 cm）の背面に刻まれた碑文。

地輪は中央に「慶哲」、その左右に「□（逆カ）修塔婆一基／大永二年壬午十一月」と記されている。純次は 15 世紀後半から 16 世初頭の人物で、後の大村彦右衛門純勝は子孫にあたる。

天正 2 (1574) 年、「異国醜類（キリシタン）」に墓所が破壊されたため、天和 2 年に子孫の弥五左衛門純茂が供養と再興のために観音像を建て、その背面に建立の経緯を記したものである。





## 本経寺大村藩主大村家墓所内 元和二年八月八日銘心明院常禅墓地輪

元和 2 (1616) 年 8 月 8 日 大村市古町

初代大村藩主・大村喜前の霊廟の右前に立つ、高さ約 1.4m の有耳五輪塔の墓。塔身は空輪から順に「妙」「法」「蓮」「華」「経」が彫られ、地輪には「元和二丙辰天／八月上旬八日」「心明院／常禅靈」、地輪背部に「西太郎左衛門／藤原前隆」と彫られている。

西太郎左衛門は、下総結城氏の末裔とされ、喜前の代に大村に来て仕えたという。喜前の死去の時に殉死したという。「郷村記 第八 寺院」の本経寺の項には、「近臣」と記されている。



## 本経寺大村藩主大村家墓所内 元和二年八月八日銘朝鮮人秀山墓

元和 2 (1616) 年 8 月 8 日  
大村市古町

初代大村藩主・大村喜前の霊廟の左前に立つ、高さ約 1.2m の小型の有耳五輪塔の墓。

塔身は空輪から順に「妙」「法」「蓮」「華」「経」が彫られ、地輪には「静散靈／元和二八月八日」、水輪背部に「朝鮮人秀山」と彫られている。

秀山は、喜前に殉死した人物とされ、地輪に彫られた紀年銘も喜前の死去と同日になっている。

## 本経寺大村藩主大村家墓所内 元和四年七月十四日銘発性院殿日然神儀笠塔婆塔身

元和 4 (1618) 年 7 月 14 日  
大村市古町

大村純忠の三男で、初代藩主の喜前の弟、純直の墓。善次郎、右馬之助とも称し、大村藩では 970 石余を知行した。朝鮮出兵に従軍して南原城攻めでは一番乗りを果たした。また、帰国後には徳川家康にも拝謁した有力一族の一人である。

墓塔は高さ約 1.8m、正面中央に題目、その左右に「南無多宝如来」「南無釈迦如来」と記す一塔両尊形式となっている。塔身は笠塔婆の形式だが、大村家墓所の他の笠塔婆と比べ、扁平なものとなっている。その下に純直の法名「発性院殿／日然神儀」と没年が記されている。





## 本経寺大村藩主大村家墓所内 元和四年八月銘柳原九郎八寄進塔身

元和4（1618）年8月  
大村市古町

柳原九郎八前利が、元和4年8月に寄進した、高さ約1mの笠塔婆型の塔。現在、塔身の上にあったであろう笠は失われている。

柳原前利は京の公家、柳原家の出身で、喜前の代に食禄200石を受けていた。そして姉に法名妙円、すなわち純忠夫人で純直の母である井上氏であることから、大村家に非常に縁の深い人物であった。後に、朝廷に使えるために京都へ戻るが、武家へ仕官したことにより叶わず、大村に戻ったという。

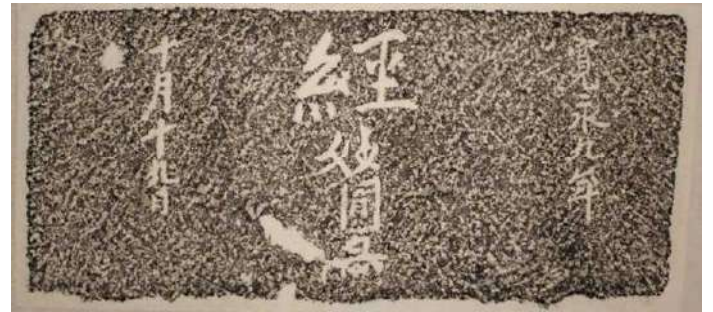
この寄進塔は、大村純直墓の斜め前にあり、かつ純直と墓と同じ形式であることから、純直の菩提を弔うために寄進されたものであろう。



## 本経寺大村藩主大村家墓所内 元和五年十一月十三日銘 涅槃院五輪塔地輪

元和5（1619）年11月13日 大村市古町

大村藩2代藩主・大村純頼の有耳五輪塔の、地輪部の拓本。法華経の「経」の文字の左右に、「涅槃院/日教居士」「元和五年/十一月十三日」と記されている。安山岩製で、基壇からの高さが約3.7m、塔自体の高さは約2m。空輪に「妙」、風輪に「法」、火輪に「蓮」、水輪に「華」、そして地輪に「経」と彫られている。現在確認できる中で、近世大村家最初の墓塔であり、中世大村家の墓塔の形式を引き継いでいるものと思われる。



## 本経寺大村藩主大村家墓所内 寛永九年十月十九日銘妙円墓地輪

寛永9（1632）年10月9日 大村市古町

初代大村藩主・大村喜前の霊廟の左前に立つ、高さ約1.2mの小型の有耳五輪塔の墓。

塔身は空輪から順に「妙」「法」「蓮」「華」「経」が彫られ、地輪には「静散霊/元和二八月八日」、水輪背部に「朝鮮人秀山」と彫られている。秀山は、喜前に殉死した人物とされ、地輪に彫られた紀年銘も喜前の死去と同日になっている。しかしながら、大村藩士の家系図「新撰土系録」には名が見えず、その事績は不明である。